

シャー・タフマースプ I 世時代の イラン史研究のための基本史料

平 野 豊

要旨 サファヴィー朝の第2代君主シャー・タフマースプ I 世は、イラン史上2番目に長い52年間の在位期間を誇る同王朝屈指の名君である。さまざまな歴史作品が彼の治世を扱っているが、主要な年代記・講話集については、今日までに版本がほぼ出揃った。16世紀サファヴィー朝史の研究は残念ながら活発とは言えないが、タフマースプ時代に限って言えば、もはや史料の制約を言い訳にできないのは明らかである。ただし、既刊作品の中には史料的価値の低いものも混在している。このような状況において新たに重要性を帯びてくるのは、基本史料の絞り込みであろう。この時代の歴史研究に最も適した作品群を具体的に示すことは研究上の意義も大きいはずである。本稿では、既刊のペルシア語史料の中から情報の質・量ともに優れた8作品を選び、基本史料に位置づけた。

基本史料の配列方法は成立年代順とした。各章ではまず、著者や作品についての史料問題を改めてまとめた。次いで、版本で底本とされている写本の書写年代の確認作業を行った。版本の価値は底本の善し悪しによって大きく左右される。したがって、同一作品に版本が複数あり、しかも双方の底本が異なっている場合には、版本の優先順位を決定した。また、版本が1つしか無い場合には、底本の素性に基づいてその評価を下し、使用上の注意点を挙げた。校訂テキストの底本に着目し、網羅的に調べ上げた先行研究は存在しない。それゆえ、本稿ではこの作業を最重要課題とし、その成果は一覧表にもまとめた。最後に、特記事項の一節を設け、これら基本史料を実際の研究に用いている筆者の私見を補遺として記した。

キーワード：史料研究, 16世紀イラン, シャー・タフマースプ I 世

はじめに

サファヴィー朝の第2代君主シャー・タフマースプ I 世（ヒジュラ暦919年ズー・アルヒッジャ月26日ー984年サファル月15日/1514.2.22-1576.5.14）は、イラン史上2番目に長い52年間の在位期間（930-84/1524-76年）を誇る同王朝屈指の名君である。数多くの歴史作品が彼の治世を扱っているが、あらゆる研究の基礎となる年代記や講話集については、今日までに

版本がほぼ出揃った。サファヴィー朝前半期（西暦 16 世紀）の研究は残念ながら活発とは言えず、政治史の整理すら完全には終わっていない状況なのだが、その半分を占めるタフマースプ時代については、もはや史料制約を言い訳にできないのは明らかである。

ところで、既刊史料の増加に応じて、新たに重要性を帯びてくるのが基本史料の絞り込みである。出版物である以上、出版するに足らない作品はないはずだが、中には必ずしも史実描写にこだわらない歴史文学的な作品もある。それらを排除するのは当然として、その上でさらに、作品自体の史料的価値が高いものについても、同時代史料とそうでないものとでは明確に差別化を図らなければならない。むしろ、タフマースプの没後に書かれた作品を完全に排除してしまうと、治世末期の情報が極端に不足する。生前の彼を知る人間が著した作品までは条件の範囲内とすべきであろう。また、同時代史料であっても、考察期間の短さから利用機会が極端に限られてくるもの、例えば、欧文報告書などはさしあたり除外すべきである。以上の点を考慮して、本稿では既刊のペルシア語史料の中から情報の質・量ともに優れた 8 作品を選び、基本史料に位置づけた。

これらの作品は、多くの場合、版本序文にて書誌情報が整理されており、その幾つかは最良の史料解題となっている。ただし、著者の自筆写本が現存しない作品の場合、著者の人物像や原典の成り立ちを知るだけでは、校訂テキストの真の理解には至らない。むしろ重要なのは、版本の校訂作業についての関心、特にその中心に据えられている底本 (*noskhe-ye asās*) に対する理解であろう。テキストの出来は、複数ある写本のうちの何れを底本とするかによって大きく左右されるからである。文献学的な見地からの史料研究は増えつつあるものの、校訂テキストにおける底本という着眼点は、一見平凡に見えるためか、一種の盲点となっているように思う⁽¹⁾。

そこで本稿では、いかなる写本が底本とされているかの確認を最重要課題とした上で、改めて史料解題を整理し直すことにする。校訂者序文があるとはいえ、中には参考文献を紹介するのみで解題には全く立ち入っていないものもある。その場合には、Monzavi 目録のような基礎文献や、写本所蔵先機関の図書目録に頼った。さらに、特記事項の項目も設けたが、そこでは筆者の私見を補遺としてまとめた。

なお、作品の配列は原則として成立年代順とする。作品名については、正式名称がある場合は総カタカナ表記とし、原題が無い場合には仮題を訳語で表記する。また、写本所蔵先機関名については、すべて版本刊行時点のままにしておいた。

I. 『ハビーボッ・スィヤル続篇』（仮題）

【ZHS】: Amīr Maḥmūd b. Khwāndamīr, *Īrān dar Rūzgār-e Shāh Esmā'il va Shāh Tahmāsb-e Šafavī*, Gholām Reżā Ṭabāṭabā'ī (ed.), Tehrān (1370 AHS/1991).

【ZHS 2】: Amir Maḥmūd-e Khwāndamīr, *Tārīkh-e Shāh Esmā'īl va Shāh Ṭahmāsb-e Safavi: Zeyl-e Tārīkh-e Ḥabīb al-Siyar*, Moḥammad 'Alī Jarrāḥī (ed.), Tehrān (1370 AHS/1991).

1. 作 品

本作品は、タフマースプ時代の記事を含むものとしては、最も成立年代の古いペルシア語史料である⁽²⁾。サファヴィー教団の歴代当主についての伝承を序論とし、西暦 16 世紀前半にサファヴィー朝とシャイバーニー朝との間で繰り広げられた、ホラーサーン地方を巡る攻防戦の記録を本論とする講話集。『ハビーボッ・スィヤル続篇 (*Zeyl-e Ḥabīb al-Siyar*)』は仮題の一つに過ぎず、正式には無題である。著者は高名な歴史家ホーンダミールの子息アミール・マフムード。生没年共に不明。上記の仮題は父親の代表作に因んだものである。サファヴィー朝の支配を嫌ってインドに移住した父親とは異なり、息子である彼はホラーサーン地方のヘラートに居住していた。本作品の執筆動機は、当地の知事 (ḥākem) モハンマド・ハーン・シャラフオッディーンオグル・タッカルー Moḥammad Khān-e Sharaf al-Dīn oghlī-ye Takkalū (964/1557 年没) からの強い勧め (tashvīq) による⁽³⁾。ヒジュラ暦 953 年 (1546-47 年) に編纂が開始され、957 年 (1550 年) に一応の完成を見た⁽⁴⁾。

「一応」と書いたのは、原作品には未完成な面が多々あったからである。著者の死後、書写に当たった筆耕人たちは原典に大胆な加筆補正を行い、各自が適当と考える仮題を付した。あくまでも善意に基づく行為であったが、各写本間で記事内容がかなり異なる結果をもたらした。このため、例えば Monzavi 目録では、『シャー・エスマーイールとシャー・タフマースプの歴史』と『ハビーボッ・スィヤル続篇』のタイトルとで二重登録されてしまっている⁽⁵⁾。

2. 版 本

前掲の通り、Ṭabāṭabā'ī 氏と Jarrāḥī 氏による 2 種類の版本が存在するが、全く同じ年に出版されたため、相互間での言及は無い。だが、【ZHS】と【ZHS 2】とではおよそ同一史料とは思えないほどの違いがあり、それは本文に限らず、各章の章題 ('onvān) にも及ぶ。したがって、どちらを正本として使うべきかという判断決定が急務となる。

まず、【ZHS】の底本は、タブリーズ国家図書館所蔵写本 No. 3614 写本 (本章ではタブリーズ写本と略記) である。Hājī Moḥammad Nakhjavānī 氏寄贈コレクションの一冊で、『ハビーボッ・スィヤル続篇』の仮題が付されている。巻末部分が脱落しているため正確な書写年代は不明だが、同図書館の目録作成者 Yūnāsī 氏は、書誌学の見地からこれを「著者の手稿 (dast-khaṭṭ-e mo'allef)」と鑑定している⁽⁶⁾。もっとも、この見解は Monzavi 目録では採用されず、「ヒジュラ暦 10 世紀書写」という慎重な見方をされているのだが⁽⁷⁾、Ṭabāṭabā'ī 氏は「957-58

年（1550-51年）頃筆写」とYūnasī説に近い判断を下した上で、これを底本とした⁽⁹⁾。

一方、【ZHS 2】の底本は、ヤズドのヴァズィーリー図書館（＝ジャーメイェ・キャビール図書館）所蔵 No. 393 写本（以下、ヤズド写本と略記）である。同図書館の目録には『シャー・エスマーイールとシャー・タフマースプの歴史』のタイトルで登録されており、書写年として1005年ジュマダーⅡ月2日（1597. 1. 21）という明確な日付けを有している⁽⁹⁾。つまり、この写本はヒジュラ暦11世紀初頭の作であり、上記のタブリーズ写本の推定年代よりも明らかに新しいことになる。

さらに、【ZHS】は校訂作業においてこのヤズド写本も使用しているのに対し、【ZHS 2】は上記のタブリーズ写本を用いておらず、その史料価値に対する否定的見解も一切示していない。したがって、底本選定の的確さという点では両者には決定的な優劣が付けられる。【ZHS】を正本とし、【ZHS 2】を副本に位置づけた上での利用が鉄則となろう⁽¹⁰⁾。

3. 特記事項

著者はヘラートの住民であったため、基本的にはホラーサーン地方中心の歴史叙述を行っている。ただし、タフマースプが当地へ4度も遠征している関係上、宮廷軍到来の際の状況については非常に詳しい⁽¹¹⁾。また、ヘラート知事にはサファヴィー家の王子が任じられる慣習があったため、王子たちの中の誰か一人についての動向は常時観察できる立場にあった。これらの点を本作品の特性と評価した上での利用が望ましい。ただし、講話集という史料性格から、諸事件に関する日付情報は極めて乏しい。時間軸に沿った細かな検討を行う際には、年代記史料の援用が不可欠である。

版本の優先順位については既に述べたが、【ZHS 2】の方を優先すべき箇所が無い訳ではない。例えば、【ZHS】の底本であるタブリーズ写本では、巻末のみならず本の中程でも3、4葉（safhe）の脱落が生じている⁽¹²⁾。Ṭabāṭabā'ī氏はこの脱落箇所や、同写本に無い講話数章を、第三の写本であるテヘランのマレク国家図書館所蔵 No. 3882 写本（以下、テヘラン写本と略記）に基づいて【ZHS】に収録している。だが、このテヘラン写本とは、書写年として1048年シャアバーン月20日（1638. 12. 27）の日付を有する、ヤズド写本よりもさらに後代の写本なのである⁽¹³⁾。この両写本の間にも記述の不一致がかなりあるのだが、テヘラン写本を典拠とした理由についてはなぜか説明されていない。加えて、【ZHS】には造本の不備や誤植が多いなどの問題点もある。やはり、【ZHS 2】を併用するのが無難であろう。ただし、両書の内容があまりにも違うため、対応箇所を見出すのに少々苦勞する。労力の節減のため、両版本の対照表を添付しておいた（→表1）。是非とも参考にされたい。

II. 『シャー・タフマースプの覚え書き』(仮題)

【Mokāleme】: Shāh Ṭahmāsp-e Šafavī, *Mokāleme-ye Navvāb-e Jannat-makāni-ye Shāh Ṭahmāsp bā Īlchīyān-e Rūm*, Karlo G. Tabatadze (ed.), Tobilisi (1976).

【ShT】: Shāh Ṭahmāsb b. Esmā'il b. Heydarī al-Šafavī, *Tazkere-ye Shāh Ṭahmāsb*, Colonel D. Phillott (ed.) & Amrollāh Šafari (sup.), Tehrān (1363 AHS/1985).

1. 作 品

オスマン朝のスレイマン大帝との間で長く続いた戦いの経緯について、タフマースプが自らの見解をまとめた覚え書き。ヒジュラ暦 969 年 (1561-62 年)、王都ガズヴィーンにやって来たオスマン朝の使節団を前に、シャーが語った講話 (mokāleme) の筆録が骨子となっている。上記使節団の来朝は、その 1 年半ほど前からイランに亡命していた大帝の子息バヤズィド Şehzāde Bāyezid の身柄引き渡しを求めていることだったが、タフマースプの側では大帝に自らの言い分を伝える絶好の機会と捉えていた (【Mokāleme】3-5)。講話の筆録 (原稿?) は使節団によって本国に持ち帰られたと思われるが、残念ながらイスタンブルには現存せず、タフマースプの言い分が首尾よく大帝に伝わったかどうかは不明である。

本作品は序論と本論 5 章からなる。本論の内訳は次の通りである。

第 1 章: オラマ・タッカルー Olama-ye Takkalū について

第 2 章: ガーズィー・ハーン Ghāzi Khān について

第 3 章: アルガース・ミールザー Alqās Mirzā について

第 4 章: イスケンデル・パシャ Eskandar Pāshā について

第 5 章: バヤズィド王子 Solṭān Bāyezid について

1~4 章では、オスマン朝遠征軍による計 4 回のイラン侵攻それぞれについて論じられ、章題にはそれを招いた最も悪しき人物の名前が付けられている。また、第 5 章の章題には前述したバヤズィド王子の名が付けられているが、彼もまた、962 年 (1555 年) に両国間で締結された和平協約 (= アマスィヤの講和) を揺るがしかねない軽率な行いをした悪しき人物という位置づけなのだろう。

本作品の成立年代は、本論部分については 969 年 (1561-62 年) と考えて間違いはない。問題は序論である。前掲の二つの版本では全く異なる内容になっているからである。結論からいえば、本論が成立した経緯について簡潔に述べられているだけの【Mokāleme】の方が原型に近いと思われる。もう一方、すなわち、通常は本作品そのものとみなされている【ShT】の方の序論は、明らかに後付けされたものである。即位の年から 938 年 (1532 年) までの 8 年間について、十二支・ヒジュラ暦併用の年代記形式でタフマースプが一人称で叙述するスタイルの

興味深い記事なのだが、少なくとも本論と同時期に成立したものではない。この件については、他史料との絡みもあるので次章にて詳述したい。したがって、本章では特記事項は割愛する。

2. 版 本

本作品の版本として最も広く利用されている【ShT】は、1912年にカルカッタ（現コルカタ）で出版された Colonel D. Phillot 氏校訂テキストの「第二版」である。Amrollāh Şafari 氏の名前が冠されているが、氏は監修者として正誤表や索引等を付しただけであり、オフセット印刷された本文については Phillot 氏が校訂者である事実には変わりはない。いかなる写本を用いたかについては、巻末収録の「初版序文」に記されている（【ShT】82）。ただ、Phillot 氏の説明はあまりにも簡素で、ベンガル・アジア協会図書館（当時）が所蔵する二写本に基づいていること、D. Lumsden なる人物のために作成された写本を底本としていることが判る程度である。

そこで、Wladimir Ivanow 氏が作成した同協会のペルシア語写本目録を調べてみると、【ShT】の底本とは、『ターリーヘ・タフマースプ（*Tārikh-e Tahmāsp*）』の仮題が付された同協会所蔵 No. 87 写本（配架番号 D101）であることが判明する⁽¹⁴⁾。書写年代は 1212 年（1797-98 年）であり、残念ながら、作品成立から 2 世紀以上も後世の作ということになる。【ShT】には人名・地名等の綴りの誤りが非常に目立つのだが、Phillot 氏の力量不足というよりは、底本自体に問題があるのかも知れない。いずれにせよ、考証に緻密さを要する研究には不向きな版本といえよう。

一方、【Mokāleme】は、厳密には校訂本ではなく Tabatadze 氏による手書きテキストである。学術目的での利用には賛否が分かれる所だが、1010 年（1601-02 年）の書写年を有する旧ソ連所蔵の Dorn 302 写本を底本としている。これは現存する全写本の中で最も古い写本なので、やはりこれを利用しない手はない⁽¹⁵⁾。さしあたっては、【ShT】と【Mokāleme】を併用するのが最善であろう。

Ⅲ. 『ニザーム・シャーの使節の歴史』（仮題）

【IN】: Khūrshāh b. Qobād al-Ḥoseynī, *Tārikh-e Īlchi-ye Neẓām Shāh*, Moḥammad Reẓā Nasīrī & Koichi Haneda (ed.), Tehrān (1379 AHS/2000).

1. 作 品

天地創造からヒジュラ暦 971 年（1563-64 年）に至る広範なイスラーム世界史。序説、本論 7 講話（*maqāle*）、結語（*khāteme*）からなる講話集で、サファヴィー朝史は第 6 講話の第 3 説（*goftār*）にて扱われている。著者フルシャーはエラール地方の生まれであったが、おそ

らくはイスマール派の信徒であったためにインドに移住⁽¹⁶⁾、デカン五王家の 1 つであるニザーム・シャー朝の宮廷に仕えていた。主君によってサファヴィー朝への外交使節に起用され再びイランの地を踏んだのは、952 年ラジャブ月（1545 年 9-10 月）の事であった。翌月にタフマースプに拝謁して以来 19 年もの間領内にとどまり、サファヴィー朝社会を幅広く観察した。971 年（1563-64 年）、クトゥブ・シャー朝への使節派遣に帯同を許され、ようやくデカンへの帰還が叶った。だが、主君であるニザーム・シャーの許には戻ることなく、972 年ズー・アルカーダ月 25 日（1565. 6. 24）にゴルコンダ（Golkonda）で没した⁽¹⁷⁾。

本作品は、デカンへの帰還直前に一旦書き上げられ、タフマースプによる査読を受けていたことで知られる。査読後シャーから下賜された新たな参考文献こそ、前章にて紹介した『シャー・タフマースプの覚え書き』（以下、『覚え書き』と略記）の写本なのだった。著者はその翌年に亡くなるが、同書の記事内容は本作品に十分に盛り込まれている。成立年代は完全には確定されていないが、以上の経緯から、972 年（1564-65 年）にクトゥブ・シャー朝領内で成立したと考えるのが妥当であろう。序説には主君へ献じる意図をもって執筆された旨が明記されている。擲筆に至るまでの慌ただしさを反映してか、本作品は正式には無題である。なお、『ニザーム・シャーの使節の歴史』は大英図書館での登録名であり、写本所蔵先の機関によっては、『クトゥブ・シャー [朝] の歴史』の仮題を付している所もある⁽¹⁸⁾。

2. 版 本

【IN】の底本は大英図書館所蔵 Or. 153 写本である。これは分冊本の「第二冊」であり、第 6 講話の第 3～5 説と第 7 講話の 1～5 説までしか収録されていない。したがって、これを底本とする【IN】にも、アクコユンル朝以前の各講話とニザーム・シャー朝を扱った第 7 講話の第 6 説、および「結語」は収録されていない⁽¹⁹⁾。写本末尾には、書写年である 972 年ズー・アルカーダ月 20 日（1565. 6. 19）の日付と、その 5 日後に著者が亡くなった旨が記されている（【IN】320）。

【IN】では本文校訂のため、テヘラン大学中央図書館所蔵 No. 4323 写本（以下、テヘラン写本と略記）も使用された。ヒジュラ暦 10～11 世紀の間に複数の筆耕人により書写されたこの写本には、欄外余白（*hāsiye*）にタフマースプの母后追放に関する比較的長文の書き入れがある。後世の書き入れであるため史料的价值の判断は難しいが、校訂者はこれを参考資料として序文に収録している。紙の劣化により判読は非常に困難なのだが、見事にテキスト化されている（【IN】序文 pp. 26-27）。

ただし、この版本には 1 カ所だけ、極めて不可解な記述が見出せる。本文中にある「[史家] エスキャンダル・ベイグ Eskandar Beyg が『アールム・アラー（*Ālam-ārā*）』において…」という一節がそれである（【IN】81）。この『アールム・アラー』が、西暦 17 世紀前半に成

立したアッバース I 世 Shāh 'Abbās I (第 5 代君主：在位 995-1038/1587-1629 年) に関する有名な一史料を指すことは明らかである。脚注を見ると「テヘラン写本には無し」とあるが、ではなぜ底本にはあるのか。書写年代を考えるならば、読者は必ずや困惑してしまうであろう。校訂者序文には本作品の典拠が列挙されているが、もちろんそこに上記の史料の名はない(【IN】序文 pp. 23-24)。後世の人間の書き入れである可能性が高いが、万が一そうでない場合には、底本の信頼性自体が大きく揺らぐことになるだろう。

3. 特記事項

既に述べた通り、本作品は『覚え書き』を主要な情報源の 1 つとしている。この史料の記事内容は本作品にほぼそのままの形で引用されているのだが、それらの引用箇所の極端な片寄りに着目するならば、前章で保留した上記史料の原初形態について、1 つの明確な仮説を導き出すことができる。まずはこの史料を下賜された経緯について、フルシャー自身の説明を見てみよう。

小生はその頃(=971/1563-64 年)、神の御加護によりこの小冊子の執筆に従事していた。世界の隠れ家にして神の影たる陛下(=タフマースプ)は草稿をお読みになられた後、かの貴なる写本 (ān noskhe-ye sharif) を小生に下賜された。かの写本にお書きになられている幾つかの情報と物語が、同じような形でこの小冊子にも記述されるようにとの御配慮からである。(【IN】115)

引用文中にある「かの貴なる写本」とは、もちろん『覚え書き』の事である。本作品では、「[シャー] 御自身の称えるべき内容の覚え書き (aḥvāl-e sotūde-kheṣāl-e khwīsh)」(【IN】121)、あるいは、単に「御自身の覚え書き (aḥvāl-e khwīsh)」(【IN】127) などとも表記されている。この写本については、現状では前章で紹介した【ShT】そのものとほぼ同一視されており、【IN】の校訂者も該当箇所にはすべて、脚注に【ShT】での頁番号を記している。

だが、下賜された写本が【ShT】の底本と同様の形態であったと仮定するならば、直ちに不自然な点が浮かび上がる。【IN】では【ShT】の本論部分こそ十全に活用されている反面、【ShT】の序論部分の記事内容が反映された箇所が 1 つもないのである。一例を挙げると、かつて筆者が《タッカルー部の禍》という 937 年(1531 年)に発生した政治史上の大事件を調べた際、【ShT】の序論は関連情報が比較的豊富だったのに対し、【IN】の方は、内容が極めて乏しい上に事実誤認が多く、情報源として殆ど役に立たなかった⁽²⁰⁾。外来者である著者の経歴に鑑みるならば、952 年(1545 年)以前の宮廷事情については、他者からの情報に頼るほか無かったはずである。ましてやタフマースプは最大の当事者である。その彼が自ら述懐した一

級史料を本論部分のみ利用し、序論の方は一切利用しなかった可能性などまずあり得ないのである。

そうした上で改めて精査してみると、【IN】の当該記事自体も、【ShT】よりむしろ【Mokāleme】に近い文体であることが了解される。序論を含めての『覚え書き』の原初形態とは、【Mokāleme】に近いものだった可能性が極めて高いと考える。

IV. 『ノサヘ・ジャハーン・アーラー』

【JA】: Qāzī Aḥmad-e Ghaffārī-ye Qazvinī, *Tārīkh-e Jahān-ārā*, Ḥasan Narāqī (ed.), Tehrān (1343 AHS/1964).

1. 作 品

本作品 (*Nosakh-e Jahān-ārā*) は、宇宙の創造からヒジュラ暦 972 年 (1564-65 年) に至る、イランを中心としたイスラーム通史。序説 2 話 (ḥarf), 本論 3 篇 (noskhe) からなる。サファヴィー朝史は本論第 3 篇で扱われ、十二支・ヒジュラ暦併記による年代記形式で叙述されている。

著者はガーズィー・アフマド・ガッファリー・ガズヴィーニー。919 年ズー・アルヒジャ月 (1514 年 2-3 月) にレイ地方テヘランで生まれ (【JA】277)⁽²¹⁾, 975 年 (1567-68 年) に没した。ガッファリー家はサイエドではないが、その家系樹を遡ると預言者ムハンマドの教友 (ṣāḥeb) の一人だったアブー・ザル・ガッファリー Abū Zar al-Ghaffārī に達するという古い家柄である (【JA】“va”)。代々カーディー (ガーズィー) や学者を輩出するなどエラゲ・アジャム地方屈指の名家であった。父親のガーズィー・モハンマド Qāzī Moḥammad (932/1525 年没) もレイの町のカーディーであり、《ヴァッサリー Vaṣṣālī》の雅号を持つ詩人として、タフマースプの父王であるエスマーイール I 世の宮廷にも出入りしていた。

息子である彼も長じてカーディーとなったが、その前半生については不明な点が多い。959 年 (1552 年), タフマースプに献呈した史話集『ターリーヘ・ネガーレスタン (*Tārīkh-e Negārestān*)』が好評を博したことで歴史家としての名声を得た⁽²²⁾。その後、さらに本格的なイスラーム通史として書かれたのが本作品である。成立年代は 972 年 (1564-65 年) 頃で、同じくタフマースプに献じられたとされる⁽²³⁾。

2. 版 本

歴史書であることを強調するためか、『ターリーヘ・ジャハーン・アーラー』の書名で刊行された。校訂者 Narāqī 氏の言によれば、「Mojtabā Minovī 教授がテヘラン大学のために将来したイスタンブール写本の写真印画」を底本としている。それ以上の説明は無いが、この「イ

スタンブル写本」とは、版本序文にも転載されている『テヘラン大学文学部図書館所蔵写本目録』の当該項目の解説（【JA】“he”）と本文末尾に明記されている書写年の日付⁽²⁴⁾から判断するに、「Tauer 158 写本」としても知られるイスタンブルのバヤズィド図書館（当時）所蔵 Welieddin Efendi 2397 写本とみて間違いはない。そして、校訂作業で用いられた写真印画とは、テヘラン大学中央図書館文書センター所蔵マイクロフィルム No. 444（フィルム番号 266）から焼かれたものと思われる⁽²⁵⁾。

書写年代は 990 年ラビーウ I 月（1582 年 3-4 月）であり、現存最古の善本である。したがって、底本の選定は的確であり、作品全体が版本に収録されたことも幸いであった。校訂作業では他に「碩学 Qazvīnī 氏の傍注入り写本」⁽²⁶⁾とマレク国家図書館所蔵 No. 3889 写本も用いられた。特に後者は、未完ながらヒジュラ暦 10 世紀の古写本であるため、本文にも〔 〕で括られる形で頻繁に挿入されている。

3. 特記事項

著者はタフマースプと同年同月の生まれであり、同時代の観察者として特に依拠すべき存在である。シャーの即位直後に勃発した大アミール位を巡る部族間抗争の記事からして早くも非常に詳しいが、これは彼の父親が抗争の巻き添えとなって殺害されたためである（【JA】282）。治世初期の情報源として外せない史料である。サファヴィー朝史部分については年代記形式のため、日付情報が非常に詳細である。要人の本名（esm）やラガブに詳しく、宮廷社会での広い交遊が生かされている。

V. 『タクメラトル・アフバール』

【TA】: ‘Abdi Beyg-e Shīrāzī, *Takmelat al-Akhhbār*, ‘Abdol-Hoseyn Navā’ī (ed.), Tehrān (1369 AHS/1991).

1. 作 品

宇宙の創造からヒジュラ暦 978 年（1571 年）に至る、イランを中心としたイスラーム通史。序説、本論 4 部（bāb）、結語からなる。サファヴィー朝史は本論第 4 部・第 2 講話の第 3 節（ṣaḥīfe）にて扱われ、十二支・ヒジュラ暦併用の年代記形式で叙述されている。

著者はアブディー・ベイグ・シーラーズィーことホージェ・ゼイノルアーベディーン・アリー Khwāje Zeyn al-‘Ābedīn ‘Alī b. ‘Abd al-Moumen。本業は書記系官僚だが、詩人としても知られ、『ノヴィーディー Novidi』の筆名で多数の詩作品を残している。921 年（1515 年）に生まれた彼は、17 歳の頃、まずは大アミールのホセイン・ハーン・シャームルー Hoseyn Khān-e Shāmlū の配下に加わり、その後、宮廷文書局（daftarkhāne-ye homāyūn）勤務に

転じた（【TA】73）⁽²⁷⁾。以後、30 年以上もの間、主に税計算や帳簿作成などの仕事に従事した。973 年（1566 年）に退職後はアルデビールの町に移住し、隠遁生活に入った。

本作品の編纂は、タフマースプの王女パリーハーン・ハーノム *Parī Khān Khānom* に献じる意図をもって、967 年（1559-60 年）に開始されたとされる（【TA】30）⁽²⁸⁾。アルデビール移住後は、サファヴィー王家の始祖であるシェイフ・サフィーオッディーンの聖廟のすぐ近くに隠宅を構えた。当時、同聖廟附設の図書館（*ketābkhāne-ye boq'e-ye Sheykh Safī al-Dīn-e Ardebīlī*）には歴史文献が多数所蔵されていたのだが、それらは編纂作業で大いに活用されたと思われる。978 年（1571 年）、当地にて成立に至った⁽²⁹⁾。彼は 981 年（1573-74 年）に王都ガズヴィーンを訪れ、数年間滞在しているが、本作品はこの際に上記の王女へ献呈されたと思われる。没年は 988 年（1580 年）である。

2. 版 本

本作品の写本は、マレク国家図書館所蔵 No. 3890 写本 1 点しか現存しない。さらに悪いことに、これは作品成立から 1 世紀以上経たヒジュラ暦 12 世紀（西暦 17 世紀末～18 世紀末）に書写された写本である⁽³⁰⁾。このような場合、校訂者はさらなる条件悪化を避けるべく、原本を直接披見すべき所であろう。少なくとも、テヘラン大学中央図書館文書センターに収められているマイクロフィルム No. 1981（フィルム番号 58）⁽³¹⁾を利用することは不可欠だったといえる。

しかしながら、校訂者 Navā'i 氏が実際に底本としたのは、この写本そのものでも写真印画でもなく、氏の学友だった Jalāl Moḥaddeth Armūy 氏の子息 Mir Hāshem Moḥaddeth 氏による部分筆録であるという（【TA】31）。したがって、版本【TA】は少なくとも二つの問題を抱えていることになる。一つは、言うまでもなく、底本にさらなる誤写や書き漏らしが発生している危険性であり、もう一つは、原本全体を通覧していないことにより、本作品に関する校訂者の理解が充分でない可能性である。

【TA】に収録されているのは、サファヴィー王家の歴史を扱った上記の「第 3 節」と、同時代における近隣諸国、境域諸地方の支配者たちを扱った第 4 部・第 2 講話の「補遺（*zeyl*）」、そして最後の「結語」のみである。確かに、史料の価値を有するのはこれらの部分にほぼ限られようが、Moḥaddeth 氏が筆写した部分をそのまま活字化しただけという感否めない。これらの部分の作品全体の中での位置づけについてはある程度説明されているものの、序論の具体的内容が不明なのは問題といえよう。この点に関しては、今の所、筆者自身が直接原本を披見するほかない。

3. 特記事項

著者はタフマースプとほぼ同年代の生まれであり、しかも青年期から壮年期に至る三十余年間を、同じ宮廷内で過ごしていた。官僚としての地位はさほど高くなかったが、詩人としての名声があったので、宮廷内の要人たちとも近い関係にあったと想像される。つまり、史書執筆者としては非常に有利な環境にあった。

本作品の特徴としては、大事件等の叙述において、個人的な逸話を頻繁に挿入している点が挙げられる。また、有力者の本名やラガブ、兄弟親子関係にも明るため、系図作成時には大いに参考になる。比較的平易な文体で叙述されている上、独自性の高い情報を数多く提供してくれる有り難い史料である。

その一方で、【ShT】と同様に、後世の人間が理解しやすい表現に書き改められている危険性がある点にも充分注意する必要がある。同時代における術語や官職名の検討など、特に緻密さを要するテーマでの利用には適さないといえるだろう。

VI. 『ジャヴァーヘロル・アフバル』

【Javāher】: Būdāq-e Qazvinī, *Javāher al-Akhhbār: Tārīkh-e Šafaviye az āghāz tā 984HQ*, Moḥammad Rezā Naširī & Koichi Haneda (ed.), Tokyo (1999).

【Javāher 2】: Būdāq-e Monshī-ye Qazvinī, *Javāher al-Akhhbār: Bakhsh-e Tārīkh-e Īrān az Qarā Qūyūnlū tā Sāl-e 984HQ*, Moḥsen Bahrām-Nezhād (ed.), Tehrān (1378 AHS/2000)

1. 作 品

宇宙と人類の創造からヒジュラ暦 984 年（1576 年）に至る、イランを中心としたイスラーム通史。前言（dibāche）、第 1 序説、第 2 序説、結語からなる講話集。サファヴィー朝史は「結語」にて扱われ、タフマースプの治世全体を考察範囲に収めている。

著者は書記系官僚であったブーダーグ・ガズヴィーニー。916 年（1510-11 年）頃ガズヴィーンに生まれた。彼自身の述懐によれば、14 歳で宮廷文書局に入り、まずは 5 年間そこで働いた⁽³²⁾。次いで、935 年（1529 年 6 月）からの 5 年半は、I 章でも登場したシャラフオッディーンオグルの書記（monshī）として、当時この人物が知事職を務めていたバグダードの地で過ごした⁽³³⁾。941 年（1534 年 11 月末）、スレイマン大帝率いるオスマン朝遠征軍によりこの地が占領されると、再び宮廷に戻った。実はこの時、シャラフオッディーンはオスマン側から再三にわたり投降の誘いを受けていたのだが、タフマースプへの忠誠を曲げず自軍を宮廷に合流させた。タフマースプはこれを大いに喜び、長男のモハンマド王子の師傅役を任せるなど、最大級の厚遇でもって応えた。一躍寵臣となったこの主君の下で、ブーダーグも補佐役（vazir）の地位に昇進していた。したがって、この頃の宮廷内における彼の権威もまた、相当なものだっ

たと思われる。

しかしながら、943/1536 年、シャラフオッディーンがヘラート知事に任じられると主従関係に終止符が打たれた。そして、次の十余年間は、タフマースプの同腹の弟バフラー・ミールザー Bahrām Mirzā (923-56/1517-49 年) の書記として過ごすこととなった。主従関係というよりは、朋友のような間柄だったという。この王子は兄王に対する絶対的な忠誠心で知られ、特に晩年は殆ど行動を共にしていた。著者が西暦 16 世紀中葉における宮廷事情に精通しているのはそのためである。その後、1550 年代前半には王都ガズヴィーン近郊の複数の町でキャラクタータル (kalāntar) を、1550 年代後半からは、ホラーサーン地方の諸都市でヴァズィール職を務めていた。バフラームの死を境に宮廷からは距離を置いていたものの、比較的情報を得やすい環境ではあったようである。

本作品は、遅くとも 982 年 (1574-75 年) には執筆が開始され、タフマースプが逝去した 984 年 (1576 年) に成立した。この年に即位したエスマーイール II 世に献じられたと目されている⁽³⁴⁾。没年については不明である。

2. 版 本

現存する写本は 1 点のみだが、幸いなことに著者の自筆写本である。サンクトペテルブルクのロシア科学アカデミー東洋学研究所に所在するこの写本は「Dorn 288 写本」の名で知られ、書写年代として 984 年ジュマダー I 月末 (1576 年 7 月下旬) の日付を有している。近年、ほぼ同時期に 2 種類の版本が刊行された。いずれも原写本そのものではなく、テヘラン大学中央図書館文書センターが所蔵するマイクロフィルムからの写真印画 (No. 3514~3517)⁽³⁵⁾ を底本としている (【Javāher】序文 p. 20, 【Javāher 2】48)。底本が同一にもかかわらず、文字の滲みの目立つ判読困難な写本であるため、箇所によってはテキストの不一致がかなりある。サファヴィー朝史研究を目的とする場合は、本文校訂がよりの確な【Javāher】を正本として用いるべきであろう。

ただし、【Javāher 2】にも、アクコユンル朝史の章 (第 2 序説・第 4 部の第 2 章) が含まれる上、原写本にある目次が収録されているという利点がある。特に、この目次は、サファヴィー朝史の部分が作品全体の中でどのように位置づけられているかを知る上で不可欠な資料なので、是非とも参照すべきである (【Javāher 2】58-60)。

さらに、【Javāher 2】の校訂者は、このような貴重な写本がなぜロシア国内にあるのか、その歴史的経緯についても丁寧に解説している。それによると、この写本はかつてアルデビールのシェイフ・サフィーオッディーン聖廟の図書館に収められていた。だが、ガージャール朝のファトフ・アリー・シャー Fath 'Ali Shāh (在位 1797-1834 年) の時代、ロシア帝国軍によるアルデビル市占領 (1828. 1. 14) により、ティフリス経由で当時ロシアの首都だったペト

ログラード（現サントペテルブルク）へと持ち去られた。また、写本巻頭には、1017 年（1608-09 年）の日付を有するアッバース I 世のワクフナーメが記されており、上記の図書館へワクフされる以前は上記のシャーの蔵書だった事実が判るという（【Javāher 2】48-50）。

3. 特記事項

本作品について特筆すべきなのは、タフマースプの治世全体を考察範囲に収めた最初のペルシア語史料であるという点である。しかも、著者はタフマースプよりも 3, 4 年ほど前に誕生していた。したがって、記事内容の多くは同時代史料としての価値を有する。基本史料の中でも特に中心に据えるべき作品といえよう。

また、著者の経歴紹介の過程で、シャラフオッディーンオグルの名前が再び登場した点にも注目される。タフマースプ時代における史書編纂活動を考える上で、この人物が果たした役割は決して無視できないように思う。

さらに、著者の書記系官僚という経歴、また、自筆写本という史料的価値から、16 世紀中葉のイラン社会における中央・地方の官職名やその職務内容に関する情報についても、特に高い価値を認めることができる。ただし、講話形式であるため日付情報はあまり詳しくない。諸事件の日単位での展開を追うためには、年代記史料の援用が不可欠である。

VII. 『アフサンノッ・タヴァーリーフ』

【Ahsan】: Ḥasan-i-Rūmlū, *A Chronicle of the Early Ṣafawīs being the Aḥsanu't-tawārikh*, C. N. Seddon (ed.), vol. 1 (Persian Text), Baroda (1931).

【AT】: Ḥasan Beyg-e Rūmlū, *Aḥsan al-Tawārikh*, 'Abdol-Ḥoseyn Navā'i (ed.), Tehrān (1357 AHS/1979).

1. 作 品

天地創造からヒジュラ暦 985 年（1578 年）に至る、イランを中心としたイスラーム通史。全 12 巻のうち、現存するのは 807 年（1404-05 年）から 899 年（1493-94 年）までの出来事を扱う第 11 巻と、900 年（1494-95 年）から 985 年（1577-78 年）までを扱う第 12 巻の 2 巻のみである。共にヒジュラ暦による年代記形式で叙述されている。両者の識別のため、ここでは前者を『11 巻』、後者を『12 巻』と表記する。

著者はハサン・ベイグ・ルームルー。その名が示す通り、ルーム（アナトリア）からやって来たトルコマン系遊牧部族の出身である。937-38 年（1531-32 年）、ちょうど《タッカルー部の禍》（→Ⅲ章）が発生した頃にゴムの地で誕生した（【AT】313）。祖父アミール・ソルトアン・ルームルー Amīr Soltān-e Rūmlū (946/1540 年没) はガズヴィーン知事を務める有力者

だった。だが、父親を早くに亡くしていたこともあり、祖父の死後、彼は部族内で拠り所を失った。948 年（1541-42 年）、おそらくは母親の意向で、シャーの近衛集団たるコルチ軍に入隊した。

この事は、結果として、武人の視点での歴史書が執筆されるきっかけとなった。著者自身の言によれば、タフマースプがデズフル（Dezful）遠征に出立した時点（949/1542 年 10 月）⁽³⁶⁾から 980 年（1572-73 年）までの 30 年間、「すべての戦役において軍営に同行し、殆どの事件をその目で直に観察して来た」という（【AT】389）。また、それ以前の合戦や彼自身が参加していない遠征等についても、信頼できる筋から聞き取り調査を行ったとしている。

本作品は、980 年（1572-73 年）時点ではほぼ完成していたが、タフマースプの在世中には搁筆されなかった。985 年（1578 年）、さらに 5 年分の出来事が追加されてようやく成立に至った。その後の著者の動向についてはきわめて記録が乏しく、没年も不明である⁽³⁷⁾。

2. 版 本

まず、【Ahsan】の校訂者 Seddon 氏が底本に選んだのは、「Ouseley 232 写本」としても知られるケンブリッジ大学ボドレアン図書館所蔵 No. 287 写本である⁽³⁸⁾。書写年代として 1010 年（1601-02 年）の暦年が明記された美写本であるが、913 年から 932 年まで（1508～26 年）の出来事、すなわち、エスマーイール I 世時代の大部分とタフマースプ I 世時代の最初期の記事が欠落している。この大きな空白部分を補うために、A. G. Ellis 氏所蔵写本がもう 1 つの底本として利用された。この写本は、巻頭と巻末の数葉が脱落しているため書写年代は不明なのだが、前述の写本とほぼ同年代の作と推定されている。残念ながら、【Ahsan】は学術書にしては転写の誤りが目立つ上、時に数行にわたる脱落が発生するなど、極めて欠陥の多い版本となった⁽³⁹⁾。

そこで、『11 巻』の校訂者でもあった Navā'i 氏は、より完成度の高いテキストを目指し、新たな写本に基づく『12 巻』の校訂作業に着手した⁽⁴⁰⁾。この【AT】の底本には、かつて Tauer, Storey 両氏により著者自筆写本の可能性を説かれたこともあった、イスタンブールのヌール・オスマニエ図書館所蔵 No. 3317 写本⁽⁴¹⁾が選定された。「Tauer 162」としても知られる書写年代不明のこの写本からは、Minovi 氏の手配でかなり前にマイクロフィルムが撮られ、テヘラン大学に所蔵されていた⁽⁴²⁾。校訂作業にはその写真印画が利用された。

だが、この選定は上記の写本に特別な史料価値を認めてのことでは必ずしも無かった。というのも、Navā'i 氏は『11 巻』の校訂作業において既にこの写本を利用しており、その過程でそれが著者の自筆写本ではない確実な証拠を掴んでしまっているからである⁽⁴³⁾。氏が作業に用いたもう 1 つの写本⁽⁴⁴⁾が 1087 年（1676-77 年）の書写年を有していることから、少なくともそれよりは古い写本と考えていたはずだが、成立年代に関する言及は一切ない⁽⁴⁵⁾。したがっ

て、【Ahsan】の底本よりも史料的价值の高い写本かどうか判断が難しい所である。結局の所、早期刊行が待望されていたこともあり、欠落箇所が少なく判読も容易なこの写本が、『12巻』でもそのまま底本とされたというのが実情であろう。

以上の経緯をふまえるならば、テキストの完成度という点ではもちろん優っているものの、【AT】の記事が【Ahsan】よりも原典の文面に近いとまで考える積極的な理由は見当たらない。両者間に著しい異同（当該記事が無いことを含む）が生じている箇所では、【Ahsan】の記述を採用すべき場合も当然ありうる。【AT】では脚注にて【Ahsan】の異同記事がこまめに引用紹介されているので、照合の労を厭わないことが肝要である。

3. 特記事項

本作品の最大の特徴は、著者がトルコマン系遊牧部族の出身者である点だが、例えばゲゼルバーシュ (qezelbāsh) の有力者の兄弟親子関係などについて、特別に詳しいという訳ではない。また、尚武の気質を反映してか、女性に関する情報は、王家の成員を含め殆ど記されていない。内容面で特筆されるべき最良の部分は、各年次の末尾に付されている「死亡記事」(motavaffiyāt) と「その他の出来事」(vaqāye'-ye motanavve'he) である。これらの項目には、その年における特記事項、すなわち物故した要人の略歴や大地震の発生、疫病の流行など、当時の社会を知る上で有益な情報がまとめられている。

ただし、原典は既に消失し、現存する十数点の写本はすべて西暦 17 世紀以降に書写されたものである。写本の性格上、筆耕人の手を複数回経ればテキストには必ずや変化が生じる。【AT】の利用時には、なるべく他史料との併用を心がけるべきであろう。

VIII. 『ホラーサトッ・タヴァーリーフ』

【KhT】: Qāzī Aḥmad b. Sharaf al-Dīn al-Ḥoseyn al-Ḥoseynī al-Qommī, *Kholāṣat al-Tavārikh*, Eḥsān Eshraqī (ed.), 2 vols., Tehrān (1359–63 AHS/1980–84).

1. 作 品

本作品は全 5 巻構想だったと思われるが、『第 5 巻』のみが現存する。実際に全巻が執筆されたかどうか不明。サフィーオッディーンの時代からヒジュラ暦 999 年 (1590–91 年) に至るサファヴィー教団とその王朝の通史。さらに 2 年先までの記事を有する写本もあるが、その部分は後世の筆耕人による追記である。建国以前の出来事については講話形式で、建国以後の出来事は十二支・ヒジュラ暦併用の年代記形式で叙述されている。さらに、タフマースプ時代については即位年からの年次も併記されており、暦に対する非常なるこだわりが特徴である。

著者はガーズィー・アフマド・ゴンミー。953 年ラビーウ 1 月 17 日 (1546. 5. 18), ゴムの

地でフセイン系サイエドの家系に誕生した。父親は《ミール・モンシー Mir Monshi》のラガブで知られる高級官僚であった。11 歳の時、父と共にマシュハドの地に移住し、以後およそ 20 年間にその地で暮らした⁽⁴⁶⁾。初めて歴史の表舞台に登場したのは 974 年（1566 年）、著者が 20 歳の時であった。この年、オスマン帝国ではスレイマン大帝が逝去（1566.9.6）し、子息のセリム II 世が即位したのだが、この報を受けたタフマースプは、直ちに哀悼と祝賀の意を表する外交書簡を送付することを決めた。多数の文人たちが王都ガズヴィーンに集められ、長文の書簡が作成されたが、最も重要な箇所は彼ら親子によって書かれたという。両国間の和平はさらに 10 年以上継続したが、あるいはこの外交書簡の効果もあったかもしれない。なお、この書簡の写しは本作品にも収録されている。

本作品の編纂は、984 年（1576 年）にタフマースプが病没し、次男のエスマーイール II 世が第 3 代君主の座に就いたことが契機となった。新王は弱冠 30 歳の著者に対し、初代君主エスマーイール I 世から当代に至るサファヴィー朝史を書くよう命じた。だが、1 年半後この君主が急死すると、次なる支援者が現われなかったことから、編纂作業は一時中断となった。994 年（1586 年）にはゴムのヴァズィール職を拝命するなど、官僚としての出世も果たした。995 年（1587 年）、アッバース I 世が王位に就くと内乱は急速に収束へと向かい、編纂作業も漸次再開された。そして、アッバースを献呈先として、999 年（1590-91 年）ようやく成立に至ったのである。1015 年（1606 年）には、有名な書家・画家列伝『ゴレスターネ・ホナル (Golestān-e Honar)』⁽⁴⁷⁾も著したが、没年も含めその後の動向については一切知られていない⁽⁴⁸⁾。

2. 版 本

Eshraqi 氏校訂の【KhT】はまさに理想的な版本である。底本として用いられたのは、作品成立年と同じ 999 年（1590-91 年）の日付を有する、テヘランのイラン考古学博物館所蔵 No. 3726 写本（全 2 冊）である。写本の冒頭頁にはワクフナーメが記されており、その来歴が次のように述べられているという。

この書物は、アブー・ターリブの子息アリー 'Alī b. Abī Ṭāleb の聖域の番犬であるサファヴィー家のアッバースがシャー・サフィーの聖廟にワクフしたものである。希望する者は誰でも読んでよい。ただし、聖廟から外に持ち出さないことを条件とする。禁を犯して帯出する者はすべて、イマーム・フセイン Emām Ḥoseyn 殺害者と同等とみなすこととする。（【KhT】序文 p. 24）

引用文中の「サファヴィー家のアッバース」とはアッバース I 世を、「シャー・サフィーの

聖廟」とはアルデビールのシェイフ・サフィーオッディーン聖廟を指す。したがって、この写本がシャー・アッバースの旧蔵書だったこと、しかも、一族の始祖の聖廟にワクフされたほどの貴重書であることが明らかである⁽⁴⁹⁾。校訂者は慎重にも判断を保留しているが、著者がアッバースに献呈した原作品そのものか、それに準じる善本であることは疑いない。

また、Eshrāqi 氏は本文校訂のため4点の別写本を用意したが、有名なベルリン国立図書館所蔵 2^o 2202 写本（以下、ベルリン写本と略記）については、賢明にも校勘の材料から外した。なぜか 1001 年（1592-93 年）までの出来事が記されているこの写本は、かつて、テヘランの上院議会図書館（当時）所蔵 No. 6518 写本と同じ筆耕人により、同じ 1050 年サファル月（1640 年 5-6 月）に書写された写本と理解されてきた⁽⁵⁰⁾。だが、氏はこの写本には書写年も筆耕人名も一切記されていないこと、最後の2年分だけでなく、それ以前の記事についても他写本との整合性に著しく欠けることを確認した。そして、校訂作業に使用しない代わりに、巻末に後註の形で異同記事をまとめるという工夫を施した。これは、利用する側にとって実に有り難い配慮である。

なお、本作品は極めて浩瀚であるため、2つに分冊されている。タフマースプ時代の記事は第1冊に、ベルリン写本にのみ見られる異同記事は第2冊に収録されている。

3. 特記事項

著者は本稿で挙げた基本史料の著者としては最も遅く生まれた人物である。しかしながら、父親が書記系財務官僚として王家の複数の成員に仕えていたことから、16 世紀中葉の宮廷事情についても独自の情報を有していた。生誕の地であり、一時は統治にもかかわっていた聖都ゴムの情勢については特に詳しく、また、その地が戦時におけるハレムの女性たちの疎開先に指定されていたためか、王家の女性たちの動向にも明るい。さらに、建築物にも高い関心があり、宮廷地区の諸建築の描写は極めて精巧である。

本作品の編纂にあたっては、先行諸史料が十分に活用されている。とりわけⅦ章で扱った『アフサンノッ・タヴァーリーフ』の記事内容は、時に丸写しに近い形で収録されている。だが、結果的にこれはむしろ幸いな事だった。【KhT】の底本は上記史料のいかなる写本よりも製作年代の古い善本だからである。西暦 1560 年代以降の出来事を伝える基本史料は限られてくるので、【AT】の記事を最大限に生かすためにも【KhT】の援用は不可欠と考える。

おわりに

以上で、作品個々の特性についての説明を終える。著者の中には君主から直々に作品を依頼された者もいたが、いずれも史書編纂の専門職に就いていた訳ではない。すべて私撰史料であるわけだが、作品どうしを読み比べてみると同一記事もかなり目立つ。これは、先行作品の記

事を下地とした上で、異説なり独自情報なりを適宜挿入するという方法が、どの作品でもある程度共通して採用されていたためである。本稿では基本史料を成立年代順に配列したが、これは同一記事が見つかった場合、オリジナリティの所在を容易に判断できるよう配慮したものである。

冒頭で最重要課題に掲げた版本の底本についても、所蔵先機関と書写年代の確認をひととおり済ませた。この件については一覧表にまとめたのでご確認頂きたい（→ 表 2）。一応の結論としては、基本史料の中でも特に中核に位置づけるべき数点の版本、例えば【Javāher】、【KhT】などの高い信頼性を確認できた。逆に、【ShT】や【TA】、【AT】等は、原作品の史料的価値は高いものの、底本に問題を抱えているために利用の際には十分な注意を要することが解った。

また、全作品の成立年代を通覧してみると、16 世紀中葉における対外戦争の終息を潜在的な契機として編纂されたという共通性も見出せる。『ハビーボッ・スィヤル統篇』の成立が最も早かったのは、東方の大国シャイバーニー朝による領内侵攻が一足先に終息したためと思われる。紛争が一区切りついた時期が、東部境域では若干早かったのである。そもそも、この作品にはホラーサーン地方中心の歴史叙述という、他作品とは異なる特性がある。

一方、他の 7 作品はといえば、西方の超大国オスマン朝との間でアマスィヤの講和が締結された後に成立している。しかもその時期は、この和平協約が有効だった四半世紀の間（1555～78 年）に集中していることが確認できる。これらの作品は宮廷中心の歴史叙述という点で共通している。実は、この時期にはそれまでの移動宮廷の伝統が一時的ながらも廃され、宮廷が王都ガズヴィーンに完全に定着するという文化史的にも極めて興味深い変化があった。まさに時代を画する大きな転機を迎えていた訳だが、時代が変わったというこの意識こそ、それまでのタフマースプの事績を総括し、史書に記録しようという動きをもたらしした根本的な要因だったように思うのである。

最後に、研究テーマによっては、史料的適性という面でこれらを凌ぐ作品ももちろんある。例えば、文化史研究に好適な作品群としては、詩人伝などの列伝史料を挙げることができる。ただし、その多くは未刊であり、既刊作品の史料的価値が未刊作品のそれよりも上であるとは必ずしも言えない。史料的性格という面でも相当な差異が見られるので、それらはまた別の機会に一括して論じられるべきであろう。だが、いかなるテーマを扱うにしても、タフマースプ時代に関係する場合には、本稿で挙げた基本史料が必須文献となる事実は動かないと確信するものである。

註

- (1) 邦語による基礎文献としては、本田実信「ペルシア語史料解説」『モンゴル時代史研究』、東京大学出版社、1991 年、535-594 頁（初出：同「イラン」『アジア歴史研究入門』4、同朋舎、1984 年、

- 593-662 頁) が挙げられる。西欧諸国にて蓄積された当該研究のダイジェストとして非常に有用。サファヴィー朝時代に考察対象を絞った研究としては, Sholeh A. Quinn, *Historical Writing during the Reign of Shah 'Abbas: Ideology, Imitation, and Legitimacy in Safavid Chronicles*, Salt Lake City (2000) がある。ただし, こちらは歴史叙述の時代的变化というものに関心が移っており, 史料解題のような基礎的研究をさらに深く掘り下げたものではない。
- (2) これより先, 948 年 (1542 年) の時点で, ミール・ヤフヤー Mir Yahyā 著『ロッポッ・タヴァーリーフ (*Lobb al-Tavārikh*)』が既に成立していた。しかしながら, この作品は内容的には初代君主エスマーイール I 世の時代までを扱うものであり, タフマースプの治世はまだ考察対象とされていない。
- (3) 名目的には, タフマースプの長男ソルターン・モハンマド・ミールザー Solṭān Moḥammad Mirzā (後の第 4 代君主) がヘラート知事であった。西暦 16 世紀における同王朝のヘラート知事職は, 王子の師傅 (lale) を務める有力アミールが代行する形をとっていた。なお, シャラフオッディーンオグルの経歴については下記の論考を参照。Maria Szuppe, *Kinship Ties between the Safavids and the Qizilbash Amirs in Late Sixteenth-Century Iran: a Case Study of the Political Career of Members of the Sharaf al-Din Oghli Tekelu Family, Safavid Persia*, Charles Melville (ed.), London・New York (1996), pp. 79-104.
- (4) 本史料の基本情報については, Kārang 氏の下記の論文を参照することが望ましい。'Abdol-'Alī Kārang, *Tarikh-e Shāh Ṭahmāsb, Nashriye-ye Ketābkhāne-ye Mellī-ye Tabriz* 7 (1343 AHS/1964). 残念ながら, 筆者は Kārang 論文を直接利用できなかったため, Ma'āni 氏の著作の当該項目を参照した (Aḥmad Golchin Ma'āni, *Tarikh-e Taḡkere-hā-ye Fārsī*, vol. 2, Tehrān (1350 AHS/1972), pp. 540-544)。なお, 上記項目では Kārang 論文がほぼ丸ごと転載されている。Ma'āni 氏個人の知見は特に加えられていないので, 利用時には注意が必要である。
- (5) Aḥmad Monzavi, *Fehrest-e Noskhe-hā-ye Khaṭṭi-ye Fārsī*, vol. 6, Tehrān (1353 AHS/1975), p. 4249, pp. 4326-4327.
- (6) Mīr Vadūd Seyyed Yūnasī, *Fehrest-e Ketābkhāne-ye Mellī-ye Tabriz*, vol. 2, Tabriz (1350 AHS/1971), p. 704.
- (7) Monzavi, *op. cit.*, p. 4249, p. 4326.
- (8) 【ZHS】序文 p. 15.
- (9) 【ZHS 2】序文 pp. 33-34. および, 【ZHS】序文 p. 16 を参照。なお, 本来ならば, 同図書館所蔵写本目録の当該項目 (Moḥammad Shīrvānī, *Fehrest-e Noskhe-hā-ye Khaṭṭi-ye Ketābkhāne-ye Vaziri-ye Yazd*, vol. 1, Tehrān (1350 AHS/1972), pp. 357-359) に最も依拠すべき所だが, 作品成立年や No. 393 写本 (=ヤズド写本) の書写年といった最重要事項について事実誤認や誤植が見られるので, 本稿では採用しなかった。
- (10) ただし, 【ZHS】の書名は, 史料の校訂本としては明らかに不適切である。底本に『ハビーボッ・シヤル続篇』の仮題が付されているのならば, 当然それを用いるべきだった。逆にいえば, たとえ副題であっても, 【ZHS 2】には『ハビーボッ・シヤル続篇』のタイトルを用いる資格はなかったことにもなる。混乱しやすいので要注意。
- (11) 【ZHS】の校訂者 Ṭabāṭabā'i 氏は, サファヴィー朝後半期に成立した浩瀚なペルシア語史書『ロウザトッ・サファヴィーイェ』の版本校訂者でもある。氏も指摘している通り, 同書中のエスマーイール I 世の治世後半 (チャルデランの戦い以後) からタフマースプ I 世の治世前半までの部分は, 『マフムードの書 (*Ketāb-e Maḥmūd*)』, すなわち, 本作品を主要な情報源として書かれたものである (【ZHS】序文 pp. 1-2.; Mīrzā Beyg-e Jonābadī, *Rouzat al-Ṣafaviye*, Gholām Reżā Ṭabāṭabā'i Majd (ed.), Tehrān (1378 AHS/1999), pp. 902-903)。
- (12) Ma'āni, *op. cit.*, p. 541.
- (13) 【ZHS】序文 p. 16. および, 【ZHS 2】序文 pp. 34-35 を参照。

- (14) Wladimir Ivanow, *Concise Descriptive Catalogue of the Persian Manuscripts in the Collection of the Asiatic Society of Bengal*, Calcutta (1924), pp. 27-28.
- (15) 本作品の諸写本・諸版本については、下記の文献案内にも簡単な説明がある。C. A. Storey, *Persian Literature: A Bio-bibliographical Survey*, II /2, London (1936), pp. 305-306. なお、【ShT】の監修者 Safari 氏は、タフマースプの生涯については詳しく解説しているものの、肝心の史料解題には殆ど立ち入っていない。
- (16) 'Abdol-Hoseyn Navā'i 氏の寄稿文を参照 (【IN】前言 p. 12)。
- (17) 【IN】序文 pp. 21-23. および, Charles Rieu, *Catalogue of the Persian Manuscripts in the British Museum*, vol. 1, London (1879), pp. 107-108. を参照。なお, 【IN】には「ヒジュラ暦 972 年に至るサファヴィー朝史」という副題が付されているが, 本文中に「972 年」という暦年は出てこないはずである。また, Rieu 目録では本作品を「970 年 (1562-63 年) に至る通史」としているが, 執筆時現在として「971 年」の暦年がある以上, こちらも正確さを欠いている。
- (18) Monzavi, *op. cit.*, pp. 4103-4104.
- (19) Rieu, *op. cit.*, pp. 110-111. なお, Monzavi 目録によれば, 【IN】に収録されていない全 3 集 (majles) の「結語」には, 著者がイラン滞在中に交遊したサイエド, ウラマー, 詩人等の名士列伝がまとめられているという (Monzavi, *op. cit.*, p. 4103)。
- (20) この件については右の小論を参照されたい。拙稿「《タッカルー部の禍》のターリーフで知られる部族間内訌について」『明大アジア史論集』10, 2005 年, 55-67 頁。
- (21) Quinn 氏は「910/1504-05 年頃」の誕生としているが, その典拠は版本【JA】である。単なる不注意による誤記であろう (Quinn, *op. cit.*, p. 17)。
- (22) 『ネガーレスターン』ではサファヴィー朝期の出来事は扱われていない。【JA】の校訂者 Narāqi 氏は, 序文の大半をなぜかこの作品の解説に費やしており, 肝心の『ジャハーン・アーラー』については自らの見解を殆ど示していない (【JA】“be”-“he”)。
- (23) Rieu, *op. cit.*, pp. 111-115.; Storey, *Persian Literature*, II /1, London (1935), p. 116.; Monzavi, *op. cit.*, pp. 4136-4137.
- (24) 版本では, 暦年のアラビア数字は正しいものの, なぜか文字表記の方が「ヒジュラ暦 970 年」と誤記されている (【JA】310)。この誤植は Monzavi 目録にも引き継がれてしまっているのだが, 上記の年にはまだ作品自体が成立していないことに注意。「990 年」が正しい (Monzavi, *op. cit.*, p. 4136)。
- (25) Monzavi, *ibid.*; Felix Tauer, Les Manuscrits Persans Historiques des Bibliothèques de Stamboul (1), *Archiv Orientalní* 3 (1931), p. 117.; Moḥammad Taqī Dānesh-Pazhūh, *Fehrest-e Noskhe-hā-ye Khaṭṭī-ye Ketābkhāne-ye Dāneshkade-ye Adabiyāt: Majalle-ye Dāneshkade-ye Abdabiyāt-e Dāneshgāh-e Tehrān*, VIII/1, Tehrān (1339 AHS/1961), pp. 195-196.
- (26) テヘラン大学文学部図書館 (当時) 所蔵写本 Jīm-248(1)~(3)を指すものと思われる (Dānesh-Pazhūh, *op. cit.*, p. 196)。Monzavi 目録によれば, この写本は「Mir 'Ali Naqī Kāshānī がロンドンにて大英博物館所蔵 Or. 114 写本 (×Or. 1141 写本) を筆写し, Qazvīnī が校正したもの」とのこと。つまり, 西暦 17 世紀に書写された Or. 114 写本から, さらに 20 世紀の人間が筆写したものである (Monzavi, *ibid.*)。
- (27) ホセイン・ハーンは 938/1531 年に大アミールに就任し, 941/1534 年に処刑されている。著者が宮廷文書局勤務に転じた時期については, 上記期間内の後半と想定される。
- (28) Monzavi, *op. cit.*, p. 4131.
- (29) 成立年代については, かつて, 漠然と 985 年 (1577-78 年) から 988 年 (1580 年) までの間に比定されていた (Monzavi, *ibid.*)。しかしながら, 校訂テキスト本文には「一部は 978 年, 一部は 979 年である所のひつじの年の初め [に成立]」(【TA】132) という明快な記述が見出せる。イラン世界での十二支は春分を起点とするので, 具体的には 978 年末 (1571 年 4-5 月) 頃であろうか。

- (30) 書誌情報については、マレク国家図書館の写本目録を参照 (Īraj Afshār & Moḥammad Taqī Dānesh-Pazhūh (ed.), *Fehrest-e Ketāb-hā-ye Khaṭṭī-ye Ketābkhāne-ye Mellī-ye Malek*, vol. 2, Tehrān (1354 AHS/1975), p. 165)。
- (31) Monzavī, *ibid.*
- (32) 本作品には、著者が自らの経歴を詳細に綴った興味深い一講話が設けられている (【Javāher】100-03, 【Javāher 2】187-91)。官僚としての職務内容や俸給額が具体的に記された史料として貴重だが、併記されている年次と歴史上の出来事との整合性にはやや欠ける。この件については、Savory 氏による右の訳注付き論説も参照。Roger M. Savory, A Secretarial Career under Shāh Ṭahmāsp I (1524-1576), *Islamic Studies* II (1963), pp. 343-352.
- (33) シャラフオッディーンオグルは 933 年 (1527 年) から 2 年間、ガズヴィーン知事を務めていた。この時、彼は自らの補佐役 (vezārat o vekālat) にこの都市の有力者であった著者の母方のおじ (khāl) を充てていた。935 年 (1529 年 6 月)、バグダード知事への転任を命ぜられると、シャラフオッディーンオグルはこの人物に同行を求め、彼もまた、甥である著者をバグダードに伴ったのだった (【Javāher】100, 【Javāher 2】188)。(Savory, *op. cit.*, p. 350.; Szuppe, *op. cit.*, pp. 81-82)
- (34) Monzavī, *op. cit.*, p. 4136.
- (35) Moḥammad Taqī Dānesh-Pazhūh, *Fehrest-e Mikrofilm-hā-ye Ketābkhāne-ye Markazi va Markaz-e Asnād-e Dāneshgāh-e Tehrān*, Vol. 3, Tehrān (1363 AHS/1985), p. 225.
- (36) デズフル遠征の記事は、本作品では「ヒジュラ暦 948 年 (1541-42 年) の出来事」の条に記されているが、他史料の当該記事を含めて総合的に検討するならば、949 年秋 (1542 年 10-11 月) の出来事と判断される。
- (37) C. N. Seddon, Ḥasan-i-Rūmlū's Aḥsanu't-tawārikh, *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland* (1927), pp. 307-313.; 【AT】序文 pp. 22-27.
- (38) Storey, *Persian Literature*, II/2, p. 307.; 【Ahsan】i-ii.
- (39) Seddon 氏によれば、ボドレアン写本の筆耕人には極めて大胆な省略癖があった。しかも、校訂作業に用いられた三写本はいずれも同一の写本 (ただし、原典ではない) から書写された可能性が大きいという (Seddon, *ibid.*)。氏が底本の誤記や省略を復元し切れなかった根本的な原因は、これらの点にあるものと思われる。
- (40) 非常に紛らわしいことに、『11 巻』と『12 巻』の版本の書名は全く同一である。著者名の微妙な違いにより識別されている。「ベイグ」(Beyg) の称号がない方が『11 巻』、ある方が『12 巻』である (【AT】vol. 11: Ḥasan-e Rūmlū, *Aḥsan al-Tawārikh*, 'Abdol-Ḥoseyn Navā'i (ed.), Tehrān (1349 AHS/1970))。
- (41) Tauer, *op. cit.*, p. 118.; Storey, *ibid.*
- (42) テヘラン大学中央図書館文書センター所蔵マイクロフィルム No. 176 (フィルム番号 4) (Monzavī, *op. cit.*, p. 4091)。
- (43) 【AT】vol. 11, 序文 p. 28.
- (44) イラン国民議会図書館所蔵 No. 2266 写本。「ヒジュラ暦 984 年 (1576-77 年) の出来事」の条の途中 (【AT】611) で終わる未完写本である (【AT】序文 p. 26)。書写年代等の詳細については同図書館の目録を参照 (Sa'id Nafisi, *Fehrest-e Ketābkhāne-ye Majles-e Shourā-ye Mellī*, vol. 6, Tehrān (1344 AHS/1965), pp. 223-224)。
- (45) 『11 巻』出版後に執筆された Monzavī 目録の当該項目では、漠然と「ヒジュラ暦 11 世紀 (西暦 16 世紀末～17 世紀末)」の書写と記されている (Monzavī, *op. cit.*, p. 4091)。
- (46) 964 年 (1556-57 年)、タフマースプは甥のエブラーヒーム・ミールザー Ebrāhīm Mirzā をマシュハド知事として派遣した。この時、著者の父ミール・モンシーがエブラーヒームの補佐役、すなわち、マシュハドのヴァズィールとして土地と徴税に関する諸業務すべての責任者とされた。5 年後、彼は解任され王都ガズヴィーンに戻るが、子息である著者は同行せずマシュハドにとどまった

(【KhT】序文 pp. 11-12)。

- (47) Qāzi Mir Aḥmad b. Sharaf al-Din Ḥoseyn-e Monshi-ye Qommi, *Golestān-e Honar*, Aḥmad Soheyli Khwānsāri (ed.), Tehrān (1352 AHS/1973).
- (48) 作品と諸写本についての詳細な解説は、【KhT】序文 pp. 9-28. および、校訂作業中に執筆された右の専論を参照。Ehsan Echraqi, *Le Kholâsat al-Tawârikh de Qâzi Ahmad connu sous le nom de Mir Monshi*, *Studia Iranica* 4 (1975), pp. 73-89.
- (49) したがって、その後何事もなければ、ロシア軍に持ち去られる運命にあったはずである (→VI章)。だが、同写本・第2冊末尾の書き入れによると、当写本はなぜか館外に流出し、1197年(1783年)には Moḥammad Kamāli なる者の書室に入り難を逃れた。その後、1296年(1879年)には Abū al-Qāsem Farāhāni 氏の手に移ったという (【KhT】序文 p. 25)。
- (50) Monzavi, *op. cit.*, pp. 4318-4319. なお、本作品の項目には誤植や記述の誤りが特に目立つので要注意。

表1 『ハビーボッ・スィヤル続篇』両版本の対照表

【ZHS】		【ZHS 2】	
自序	pp. 18-27	pp. 3-8	著者による自序
1 話	pp. 28-30	pp. 9-10	エスマーイール I 世の属性について
2 話	pp. 31-32	pp. 10-11	
3 話	pp. 33-44	pp. 11-18	
4 話	pp. 45-48	pp. 19-21	
5 話	pp. 49-55	pp. 21-25	
6 話	pp. 56-57	p. 26	
7 話	p. 58	p. 26	
8 話	pp. 59-61	pp. 27-28	
9 話	pp. 62-63	pp. 28-29	
10 話	pp. 64-67	pp. 29-31	エスマーイール誕生 (1487 年 7 月)
11 話	pp. 68-72	pp. 31-33	
12 話	pp. 73-76	pp. 34-35	
13 話	pp. 77-80	pp. 36-37	【ZHS】13 話, 14 話に相当。一話に結合。
14 話	pp. 81-83	pp. 37-39	
15 話	pp. 84-93	pp. 43-48	
16 話	pp. 94-96	pp. 49-50	【ZHS】16 話, 17 話に相当。一話に結合。
17 話	pp. 97-100	pp. 50-52	
18 話	pp. 101-103	pp. 52-54	
19 話	pp. 104-107	pp. 54-56	
20 話	pp. 108-110	pp. 56-58	
21 話	pp. 111-113	pp. 58-59	☆テヘラン写本には本講話ナシ。
22 話	pp. 114-116	pp. 60-61	
23 話	pp. 117-119	pp. 61-62	
24 話	pp. 120-123	pp. 63-64	
25 話	pp. 124-127	pp. 65-66	エスマーイールによるタブリーズ征服。サファヴィー朝政権樹立 (1501 年秋)
26 話	pp. 128-135	pp. 67-72	
[27 話]	[pp. 136-137]	p. 72	エスマーイール I 世の第 1 次ホラーサーン遠征出立 (1510 年夏) ☆タブリーズ写本には本講話ナシ。
[28 話]	[pp. 138-139]	pp. 73-74	エスマーイール I 世のホラーサーン地方征服 (1510 年冬) ☆タブリーズ写本には本講話ナシ。
29 話	pp. 140-143	pp. 74-75	

シャー・タフマースプ I 世時代のイラン史研究のための基本史料

30 話	pp. 144-147	pp. 75-78	
31 話	pp. 148-151	pp. 78-80	
32 話	pp. 152-153	pp. 80-81	【ZHS】32 話前半に相当。
	pp. 153-154	pp. 81-82	【ZHS】32 話後半に相当。
33 話	pp. 155-157	pp. 82-83	タフマースプ誕生 (1514 年 2 月)
34 話	pp. 158-159	pp. 84-85	エスマーイール I 世の第 2 次ホラーサーン遠征 (1513 年夏)
35 話	pp. 160-164	pp. 85-88	チャルデランの戦い (1514 年 8 月)
36 話	pp. 165-167	pp. 88-89	タフマースプのヘラート知事就任 (1516 年着任)
37 話	pp. 168-170	pp. 90-91	
38 話	pp. 171-175	pp. 91-94	
39 話	pp. 176-179	pp. 94-96	
40 話	pp. 180-184	pp. 96-100	
41 話	pp. 185-188	pp. 100-102	
42 話	pp. 189-191	pp. 103-104	
43 話	pp. 192-194	pp. 104-106	
44 話	pp. 195-196	pp. 106-107	
45 話	pp. 196-203	pp. 107-111	
46 話	pp. 204-209	pp. 111-114	サーム・ミールザーのヘラート知事就任 (1522 年着任)
47 話	pp. 210-211	pp. 114-115	タフマースプの宮廷への帰還
48 話	pp. 212-213	pp. 115-116	
49 話	pp. 214-217	pp. 116-118	
50 話	pp. 218-219	p. 119	
51 話	pp. 220-223	pp. 119-121	エスマーイール I 世逝去 (1524 年 5 月)
52 話	pp. 224-227	pp. 125-127	タフマースプ I 世即位 (同上)
脱落箇所?		pp. 127-128	☆【ZHS】には対応部分ナシ。タブリーズ写本の中程で発生しているという数頁の脱落とは、この箇所である可能性大。
53 話	pp. 228-232	pp. 128-131	
54 話	pp. 232-236	pp. 131-133	
55 話	pp. 237-244	pp. 133-137	【ZHS】55 話の前半 4/5 に相当。
	pp. 244-245	pp. 137-138	【ZHS】55 話に後半 1/5 に相当。
56 話	pp. 246-248	pp. 138-139	
57 話	pp. 249-255	pp. 140-143	
58 話	pp. 256-259	pp. 143-145	

59 話	pp. 260-268	pp. 146-152	タフマースプ I 世の第 1 次ホラーサーン遠征 (1528 年初夏出立)
60 話	pp. 269-271	pp. 152-153	
61 話	pp. 272-273	pp. 154-155	
62 話	pp. 274-276	pp. 155-156	タフマースプ I 世の第 2 次ホラーサーン遠征 (1530 年初夏出立)
63 話	pp. 277-278	pp. 156-157	バフラーーム・ミールザーのヘラート知事就任 (1530 年 10 月)
64 話	pp. 279-284	pp. 157-161	タフマースプ I 世の第 3 次ホラーサーン遠征 (1533 年夏出立)
65 話	pp. 285-289	pp. 161-163	サーム・ミールザーのヘラート知事再任 (1534 年夏)
66 話	pp. 290-292	pp. 164-166	
67 話	pp. 293-298	pp. 166-170	
68 話	pp. 299-301	pp. 170-172	
69 話	pp. 302-306	pp. 172-175	サーム・ミールザーによるサファヴィー朝からの自立の動き。ガンダハール地方征服戦とその失敗 (1535 年)
70 話	pp. 307-308	p. 176	
	pp. 308-309	pp. 176-177	
71 話	pp. 310-315	pp. 177-180	
72 話	pp. 316-320	pp. 180-182	
73 話	pp. 321-323	pp. 182-184	
74 話	pp. 324-326	pp. 184-185	
75 話	pp. 327-328	pp. 185-186	ソルターン・モハンマド・ミールザーのヘラート知事就任。師傅シャラフオッディーンオグルが同行 (1536 年)
76 話	pp. 329-330	pp. 186-187	
77 話	pp. 331-333	pp. 187-188	
78 話	pp. 334-336	pp. 188-189	
79 話	pp. 337-339	pp. 190-191	
80 話	pp. 340-342	pp. 191-192	
81 話	pp. 343-344	pp. 193-194	
82 話	pp. 345-348	pp. 194-196	
83 話	pp. 349-352	pp. 196-198	タフマースプ I 世の第 4 次ホラーサーン遠征 (1536 年 9 月出立)
84 話	pp. 353-356	pp. 198-200	
85 話	pp. 357-358	なし	☆タブリーズ写本にのみ記事アリ
86 話	pp. 359-361	なし	☆タブリーズ写本にのみ記事アリ
87 話	pp. 362-365	pp. 200-202	
88 話	pp. 366-370	pp. 202-205	

シャー・タフマースプ I 世時代のイラン史研究のための基本史料

89 話	pp. 371-373	pp. 205-206	
90 話	pp. 374-378	pp. 207-209	
91 話	pp. 379-381	pp. 209-211	
92 話	pp. 382-384	pp. 211-212	ムガル朝皇帝フマーユーンのイラン亡命
93 話	pp. 385-387	pp. 212-214	
94 話	pp. 388-390	pp. 214-216	フマーユーンのヘラート到着 (1544 年)
95 話	pp. 391-397	pp. 216-220	フマーユーンのサファヴィー朝宮廷への合流、及び、歓待の様子
96 話	pp. 398-399	pp. 220-221	アルガース・ミールザーに叛意の兆し
97 話	pp. 400-404	pp. 221-223	アルガースのオスマン朝への亡命 (1547 年)
98 話	p. 405	p. 224	
99 話	pp. 406-409	pp. 224-227	アルガース・ミールザーの亡命事件の顛末 (スレイマン大帝の第 3 回イラン遠征)
100 話	pp. 410-414	pp. 227-229	シャラフオッディーンオグルのガルジスタン地方出兵
101 話	pp. 415-417	pp. 229-230	
102 話	pp. 418-420	pp. 231-232	
103 話	pp. 421-423	pp. 233-234	☆本作品の執筆時点の暦年として、「957 年」(1550 年)の記載あり
104 話	pp. 424-427	pp. 235-236	【ZHS】104 話と結語に相当。一話に結合。タブリーズ写本では結語が脱落しているため、書写年は不明。【ZHS】の末尾の日付は、テヘラン写本に基づいているので要注意。
結語	pp. 428-431	pp. 236-238	

備考：【ZHS】でいう所の 14 話までが序論、15 話以降が本論である。なお、【ZHS】と【ZHS 2】とでは、各講話の題目も記事内容自体にも相当な差異が認められる。

表2 基本史料一覧

No.	史料 (版本)	成立年代	校訂テキストの底本	底本の書写年代
1	【ZHS】	957/1550 年	タブリーズ国家図書館所蔵 No. 3614 写本	957-58 年 (1550-51 年) 頃
	【ZHS 2】		ヤズド・ヴァズィーリー図書館所蔵 No. 393 写本	1005 年ジュマーダー II 月 2 日 (1597 年 1 月 21 日)
2	【Mokāleme】	969/1561-62 年筆録	Karlo Tabatadze 氏による手書きテキスト (原本: Dorn 302 写本)	1010 年 (1601-02 年)
	【ShT】	同上 (序論除く)	ベンガル・アジア協会所蔵 No. 87 写本	1212 年 (1797-98 年)
3	【IN】	972/1564-65 年頃	大英図書館所蔵 Or. 153 写本	972 年ズー・アルカーダ月 20 日 (1565 年 6 月 19 日)
4	【JA】	972/1564-65 年頃	テヘラン大学中央図書館文書センター所蔵マイクロフィルム No. 444 (フィルム番号 266) (原本: イスタンブル・バヤズィド図書館所蔵 Welieddin Efendi 2397 写本 (=Tauer 158))	990 年ラビーウ I 月 (1582 年 3-4 月)
5	【TA】	978/1571 年	Mir Hashem Moḥaddeth 氏による筆写本 (原本: テヘラン・マレク国家図書館所蔵 No. 3890 写本)	1980 年代? (原本はヒジュラ暦 12 世紀 / 西暦 17 世紀末~18 世紀末)
6	【Javāher】	984/1576 年	テヘラン大学中央図書館文書センター所蔵写真印画 No. 3514~3517 (原本: サントペテルブルク・ロシア科学アカデミー東洋学研究所所蔵 Dorn 288 写本)	984 年ジュマーダー I 月末 (1576 年 7 月下旬) (著者自筆写本)
7	【Ahsan】	985/1578 年	①ケンブリッジ大学ボドレアン図書館所蔵写本 No. 287 (=Ouseley 232), ②A. G. Ellis 氏所蔵写本	①1010 年 (1601-02 年) ②不明 (①と同時期?)
	【AT】		テヘラン大学中央図書館文書センター所蔵マイクロフィルム No. 176 (フィルム番号 4) (原本: イスタンブル・ヌール・オスマニエ図書館所蔵 No. 3317 写本 (=Tauer 162))	ヒジュラ暦 11 世紀 (西暦 16 世紀末~17 世紀末)
8	【KhT】	999/1590-91 年	イラン考古学博物館所蔵 No. 3726 写本	999 年 (1590-91 年)

所蔵機関名はすべて版本刊行時点でのもの

Sources for the Iranian History during the Reign of Shāh Ṭahmāsb I in the Ṣafavid Dynasty (Sixteenth Century)

HIRANO Yutaka

This paper critically discusses the eight sources that the author considers essential for understanding the history of the reign of Shāh Ṭahmāsb I in the sixteenth century. The eight sources are: *Zeyl-e Ḥabīb al-Siyar*, *Memoirs of Shāh Ṭahmāsb* [tentative translation], *Tārikh-e Īlchī-ye Neẓām Shāh*, *Tārikh-e Jahān-ārā*, *Takmelat al-Akhhbār*, *Javāher al-Akhhbār*, *Aḥsan al-Tavārikh*, and *Kholāṣat al-Tavārikh*.

The author has investigated when each source was originally written and what was the background of the original author. In this process, the author clarifies the specific time period when these writers were indeed contemporaneous to the Shāh and his court men. The author has also paid attention to when the sources were copied. So long as different versions of the same source are available, the author determines which version is most reliable and closest to the original.

As a result of the author's investigation, the *Javāher al-Akhhbār* is the oldest source that records the whole events that happened during the reign of Shāh Ṭahmāsb. It may be supplemented by the *Tārikh-e Jahān-ārā*. The *Zeyl-e Ḥabīb al-Siyar* is somewhat weak in descriptions of what happened in the court. The author suggests that the version compiled by Ṭabāṭabā'i should be adopted. While two versions of the *Memoirs of Shāh Ṭahmāsb* are available, the *Mokāleme-ye Navvāb-e Jannat-makānī-ye Shāh Ṭahmāsp bā Īlchīyān-e Rūm* is more reliable. The introduction of the other version of the *Memoirs of Shāh Ṭahmāsb*, *Tazkere-ye Shāh Ṭahmāsb*, may well have been written by a writer later. A possibility exists that verbs used in the *Takmelat al-Akhhbār* were re-written into expressions typical of the twelfth century A. H. The *Kholāṣat al-Tavārikh* is ideal as a source. The *Aḥsan al-Tavārikh* is as reliable as the *Kholāṣat al-Tavārikh*.

Keywords: Source criticism; Sixteenth century Iran; Shāh Ṭahmāsb I